



ひらりんちゃん通信 (園長室だより) ②

令和8年7月16日
文京区立千駄木幼稚園
園長 篠澤 恵理

役に立つ喜び

学期末を迎え、砂場の遊具は、年中組がきれいに洗ってくれました。年少組が「ありがとう」と声をかける場面もありました。年中組の子どもたちは、お礼を言われると、やる気も増すようで、とても嬉しそうでした。各学年、自分のロッカーの掃除なども頑張っています。

モルモット「モカちゃん」の世話は、3月末から今の年長組が引き継いでいます。皿に餌を足すことや、すのこと受け皿を洗うこと、ボトルの水を取り替えること、草を足すことなど、今では、声を掛け合いながら、役割を分担して行っています。年長児の世話の仕方をよく見ていると、受け皿を洗った後に雑巾で拭く場面で、初めは、雑巾を握ったまま拭こうとしていましたが、端まできれいに拭けないことに気付くと、一度雑巾を広げて、隅々まで拭けるように持ち替えていました。また、友達が餌をこぼしてしまった時には、すぐに気付いて、ホウキで集める子もいます。よく考えながら、行動に移す姿に感心しました。時には、やりたいことを宣言しても、「この前やったよね」と友達から言われ、誰がやるかを話し合う場面もあります。思うようにならないこともあります。その都度考えながら動くことの積み重ねは、大切な学びとなっています。世話を終えた後、子どもたちは、やり遂げた満足気な表情になり、役に立った喜びも伝わってきます。近くでは、年少組が、興味深くその様子を眺めていました。自分たちも一緒に世話をしているような気持ちなのかもしれません。夏休みの間も、オレンジルームの有志の子どもたちが、モルモットたちの世話をします。異年齢の関わりの中で、千駄木幼稚園の温かなつながりを感じながら、楽しんで取り組めるといいなと思っています。

「手伝い」の思い出

我が家では、学期の変わり目や誕生日・正月などの節目には、手伝いのランクを上げるような試みをしていました。これは、正直に言うと、「手伝いをしてもらうことが増えれば、きっと私の家事が分担されて、楽ができるかもしれない」という下心があったからです。「今度の誕生日が来たら、こんなこともできるかも」と、予告して楽しみにしてもらうのが、第一の作戦です。

肉を食べるときに使用するナイフで、ちくわやキュウリを切ってもらう手伝いから始め、何かの節目に、果物ナイフ、包丁へと、道具をレベルアップさせたり、新しい切り方を教えたりしました。ニンジンなどの皮むきは、片方を手で押さえ、利き手で横にスライスさせるように動かすことを伝えると安全にできました。卵を割ることが上手になると、「片手で割ってみたい」と、新たな目当ても出てきていました。餃子を包むときには、UFO型など、面白い形に包むのを楽しんでいたこともあり。野菜をちぎることや、かき交ぜることだけでも、サラダ担当として盛り付けまで任せられました。続けていくうちに、息子たちの方も、効率良く進める方法を考えたり工夫したりして、「一人でできるよ」と、自信につなげたことは、嬉しい気付きでした。

「母さんの夢はね、ただいまと帰った時に、『食事ができているよ』と、言われること」と、伝えてきたところ、その夢は、息子が高校生の時に叶いました。小学生・中学生時代は、行事や習い事、部活動などで忙しく、手伝ってもらえる時間は、案外少なかったと感じています。やったことがあることについては、頼みやすいので、幼児期からの経験が大切だと感じています。

先日のカレーの日には、年長児が、包丁で野菜を切りました。真剣な表情の後に、「できた」という喜びの笑顔が見られました。継続は力なり。この夏、様々な手伝いを提案してみよう！